「平成と私」特集

丸山隆平（9 組）

平成と私

元号が平成になった 1989 年の夏、記者として 16 年勤めた新聞社を辞めた。これ以上長居をすると、「支局長」と煽てられて広告取りをやらされるからだ。そうなったらアルバイト原稿で凌ぐことはできなくなる。

子ども 3 人。しかも「経営は 3 流だが、組合は 1 流」という会社。長女の小学校の入学式で先生に呼ばれ「給食費の補助申請をどうしますか？」と尋ねられた。

「ええ？？そんなかよ！」

「マスコミは給与が高い」という風評に惹かれ入社したが、それが成立したのは入社 1 年目だけ。オイルショックの打撃は続き、回復を見せたのは 35 歳を過ぎてからだった。

「デジタル化の中で日本のモノづくり産業の指針を示す」「ソフト化社会をリードする新産業は何か？」等々、原稿用紙を埋めていたが、時代は世紀末。これまでよりもっと大きく何か変わりそうな気がした。とにかく「よその会社のことを知った風に原稿にしているどころではない」と痛感した。

それで、1 円でも高く原稿を買ってくれるところを求めて、アルバイト原稿で手伝っていた IR（財務広報＝インベスター・リレーションズ）の企業に移った。収入は 2 倍以上になったがいつまで持つか？

「1 文字何円」の原稿で食べていくには、必死に、「馬に食わせるほど」原稿を書く必要がある。理屈でなく、キーボードに向かって指が走らなければならない。もちろん盗作をしたらそれで終わりだ。当時すでに、コピペ判明ソフトが出ていた。

何をどう書くかなど悩んでいたら、子どものミルクはどこかに流れて行ってしまう。

機関銃を撃つように聞こえる外人ライターに交じって、かな漢字変換のスペースバーを押し続け、子ども 3 人を卒業させた。一応、2 人は大学、1 人は専門学校を出て、まあ自分が親にしてもらった程度のことはしてやれた。

当時は規制緩和の時代、NTT、JR が民営化され上場。マザーズも登場して IR 市場は活性化した。だが、平成が進むにつれて、ネット IR が流行り出し、単価は急落。IR 企業は身売りされ、リストラが進んだ。

幸いなことに昭和時代には考えられなかったが、平成後半になると WEB 文化が普及、紙以外に書くところが広がった。大きな流れで言えば、企業情報の「非対称性」は今日まで依然続いている。

私にとって「平成」は何とか親の役割を果たせた時期だった。
（平成 31 年 4 月 8 日記）

昭和 59 年（1984 年）　アップルコンピュータの新型パソコン「マッキントッシュ」試用する筆者